

特113

884a

曲等
那須野

全



始



47113
884

山田流家元

那須野

山田檢校斗養一勝善作

第廿一卷及第貳詳解

那須野

琴雲井琴合
三絃三下り三絃一合

山田檢校斗養一勝善作
第廿一卷第貳及詳解

前弾^{まへ}蘭菊^{らんきく}の花^{はな}にかくる野狐^の
の臥^ふとむのこゑさへ分^{わか}ち
なく萩吹^{はぎふ}き送^{おく}る夜^よあはりに
いと物^{もの}すごきけしきかたよ。合野^{あひの}
邊^への狐火^{きねび}おもひにゆる燃^もゆ

正
3. 11. 18
内交

4冊113
884

山田流家元

那須野

山田檢校斗養一勝善作

第廿一卷及第歌詳解

那須野

琴雲井 琴一合
三絃三下り 三絃一合

山田檢校斗養一勝善作
第廿一卷第歌及詳解

前彈き 蘭菊のツレ花にかくる野狐

の野 どの合むのこゑさへ分ち
なす 秋吹き送る夜あはれに
いと物すごもいけしもかたよ。合野
邊の狐火おもひにゆる燃ゆ

天正
3. 11. 18
内交

る思おもひにま焦こがれて出いでく玉藻たまも
前まへ・秋あきの下露したつゆいとひなく。月つき
にそむけて恨言うらみごころ。過すぎく雲くも
井いにありく時とき。君きみが情なさけに幾いく
年としも。合あワせ比翼ひよくの床とこに鴛鴦うんあうの
衾ふすまかきねて契ちがひりくことも。胸むね

にくばくも忘わすれはやらで。ひ
とり涙なみだにかこち草くさ。ぬれてくを
る。袖そでの雨あめ。抑おさえわれこそは天竺てんぢく
にて。斑は足あ太子たいの墳つかのかみ。もろ
こくにては褒姒ほうじとよばれ。日ひ
の本もとにては鳥羽とばの帝みかどに宮仕みやづかへ。

玉藻前とをよりたるたより。清涼殿の御遊の時。月まだ出でぬ宵のそら。細砂吹きこく風もつれ。ワケ燈消え〜其時に。シテ吾身よりひかりを放ちて照すにぞ。君は御腦とをよりたまふ。

桐の一葉に秋たちて。シテきのあたは夏るあすか川。ッ今浮世をかくれ笠。都をあとに見なし。了。関のしら河よそにな〜。那須野の原に任みなれて。つゝに矢先にはかなくも。ワケかゝる

このみ 此身をぞつらかりき。ツレ殺生石と
 世の人ひとに。疏うとまること、なりはて
 し。涙なみだのシテ 霰あられ萩はぎすもき。合あツレ 振ふり
 みだしたるありさまに。消きえて
 はかたよくたりにけり。

那須野なすの

この歌は玉藻の前の事をいひたる大なり。昔印度に班はん足そく
 王わうといふ王ありて、其の夫人ふじん悪虚あくきょ甚しんく、王わうに勧すすめて千人せんじん
 の首くびを取りなどせしが、其の後支那しなに生うれ変かりて周しゅうの幽ゆう
 王わうの后きさきとなり、名なを褒ほう似じといふ、其の容貌くわうぼう頗おとる美みなるが、
 國くにを滅ほろぼし人ひとを感まはじ死し後ご日本にほんに來きたり、近衛院このゑいんの御代みよに
 生うれ、后きさきとなりて玉藻たまもの前まへとよぶ、人ひとを陷そふ事こと多おかりしが、
 ある夕宮中ゆふみやちゆうに御宴遊みやえんあそはされし時に、燭しゆく滅めえ、御寵姫みやちゆうぎの
 玉藻たまもの身みより光ひかりを放はなちたり、帝みかどこれより、御腦みやのうと名なせ
 られ、これを卜うらなはせられしに、玉藻たまもの前まへのわざと奏そう

くける、時に玉藻化して狐となり、東國に遁げしを、
三浦介義明、千葉介常胤、上總権介廣常詔により其の
狐を、下野の國那須野に驅ひて、義明これを射殺せり、後
此の狐の靈石となり、其の石に觸らば、鳥獸人民もみな
死す、これを殺生石といふなり、高僧大徹此の怪を止めん
とせしも、弦はさりとしが、後源公賴といふ僧石の傍に到り偈を
唱えしに、石忽ち破碎せり、其の夜夢に一女子現はれて謝し
て曰ひけるは、淨戒により天に生るるを得たりと、言ひ終り
て消えたりといふ、此の琴歌はその事をいひたるなり。
ふくらふしやうけいのえんだになきつれ、らんぎくの、花に

かくるる、やこのふしど、むしりのこゑさへ、わかち
なく、をぎいふきおくる、よあらしに、いとものすきき、
けしきかな

これは玉藻の前たまも まへの狐きつねが現あらはるる處ところとてもの凄すげきけ
しきをいひたるなるにて、白樂天はくらくてんの詩うたに凶宅きようたくといふが
あり、人住ひとすまぬ家いえの荒あれはてたる様さまをのべたる言葉ことば
に「集ふくろしすけい松まつ桂けいの枝えだに鳴なき、狐きつね蘭らん菊きくの叢くさむらに藏かくはるとあるを
其そのまゝ、取とりたるなり、集ふくろも人ひとはなれたる處ところに居ゐるも
のにて、鳴なき聲こゑの淋さびしき凄すげきもの、また狐きつねも夜出よるいで、
人ひとをなすき野邊のべに住すめば、集ふくろが松まつや桂けいの枝えだで鳴なき、狐きつね

は蘭菊の花に姿を隠くす淋しき様をいひくなり、む
このこゑさへわかちたたく、をきふきおくる、ふか
らしに、詩の續きには「蒼苔黄葉の地、日暮旋風多
し」とあり、秋蟲の一夜聲の分ちがたき位多く鳴き、萩
を吹き渡る夜嵐など、殊に物凄き光景なりとあり。

野べのきつねび、おもひにもゆる、もゆるおもひに、こがれ
出で玉ものまへ、はぎのしたつゆいとひなく、月にそむけて
うらみごと、

野べのきつねびは野邊の狐の火、おもひにもゆる、は思
ひに燃ゆるにて、甚しく思ふ事なり、思ひといふより

火に見たかゝりて切なる思ひを燃ゆるといふなり、も
ゆるおもひにこがれて出でし玉藻の前、は燃るが如き、
思ひに焦れて現はれ出でし玉藻の前にて、玉藻の前の
狐が現はれんとして狐火を出し、火につれて姿を現はす
處より、玉藻は名にて御前は尊びていふ言葉也、はぎ
のしたつゆいとひなく、月にそむけて、うらみごと、は
萩の下露に濡るるも厭はで、月に面を背むけて、怨言
を獨り言して述懐するなり、そむくは後ろ向ける事あり。
すぎし雲居にありしとき、君がなさけに、いくとせもひ
よくのところにえんわうの、ふすまかさねて、ちぎりしこと

を、むねにうばしもわすれはやらで、ひとりなみだに、
かこちぐさ、ぬれてしほる、袖の雨、

すぎく雲居にありしとき、は過ぎ去りし以前、昔漸

所に居りし時なり、玉藻が后として宮中にありし

時の事をいふ、きみがあさけにいくとせも、は帝の情御

寵愛に浴して長き年月の間をたより、ひよくのところにえ

んわうの、ふすまかさねて、は契り睦まじきをいふ、ひよ

くの事は長恨歌の處に註す、比翼の如く、床を並べてあり、

えんわうのふすまかさねては、鴛鴦は鴛鴦鳥にて夫婦

仲殊に睦まじきものなれば鴛鴦の如く睦まじく闇を

重ねてといひくにて契を重ねてなり、ちぎりし事

をむねにうばしも忘れはやらで、は契りし事は

うばらくも忘れはせずなり、ひとりなみだにかこ

ちぐさは忘れぬ昔を思ひて獨り泣きつゝ愚痴の種

なりとなり、ぬれてしほる、袖の雨、袖も涙に濡れて、

しほたれるとなり、よにくさといひたるより、くさの

濡れてしほる、といふ事によせて悲しく打ちし

ほる、といふ意をいひたるなり、袖の雨は涙の事を

いふ、

そもわれこそは、てんぢくにて、はんぞくだいくの、

つかのみもろこころにてはほうじとよばれ、日の本
には、とばのみかどにみやづかへ、玉ものまへとたりた
るをより、

そもは抑なり、玉藻の前の経歴をいふなり、われこ
そは、てんぢくにて、はんぞくたいくのつかのみは
我こそは天竺にて班足太子の塚の神にて、天竺の
天羅國王の子班足太子、王位に登らんとしけるが、
外道羅陀師の爲に教を受け千王の頭を兼り塚
の神に祭り自ら其の位に登らるべしといふに、太子は
九百九十九王を得あと一王丈となりし時に、一王を

得たるが普明王なりしといふ事佛書にあり、玉
藻は班足王の夫人として、悪處を極めし事上に云
へり、これをいひしなり、もろこしにては、ほうじと
はれ、は支那に渡りて幽王の后褒姒となり、國を滅
ぼし、人を惑はしたることをいひしなり、日の本には
とばのみかどにみやづかへ、は日本に生れ来り、鳥羽
天皇に宮仕をしてなり、玉ものまへとたりたるなり、
玉藻前となりしとたり。

せいりやうでんの、ぎよゆうのとき、月まだ出ぬよ
ひのそら、いさごふきこころ、かぜもつれ、ともこび

きこえし、そのとき、わが身より、ひかりをはなち
て、つらすにぞ、きみはごのうとなふせたまふ、

せいのりやうでんのきよゆうのとき、は清涼殿にて

管弦の御遊びありし時になり、清涼殿は中殿と

も御殿ともいひ、陛下の常にあらせらるゝ御在所な

り、月まだ出ぬ、よひのそらは宵闇の空に月なく、

いさごふきこゝかせもつれ、は砂を吹き来り、風あ

れてなかり、ともしびきえしそのときに、は燭消

し其の時に、玉藻の身よりひかりをはなちて、てら

すにぞ、きみはごのうとなりたまふ、は我が身か

ら光を放ち照したるより、帝は御腦となふせ給ふ
となり、これは初めに述べたり

きりのひとはに、秋たちて、きのふにかはるあすか河いま

はうきよをかくれがさ、みやこをあとに、見なすつ、

せきのしら河、よそになし、那須野の原に、すみな

れて、つひにおやまきに、はかなくも、かゝるこの身ぞつ

らかりき、

これより玉藻の前が宮中を驅はれて、身の衰へし
事をいふなり、初めの處に註す、きりのひとはに、
秋たちて、は支那の詩に「梧桐一葉の秋」との句あり

この意をとりたるにて、桐の葉も散り初めるとして秋の來りし事をいふなり、秋立つとは秋の來りし事なり、きのふにかはるあすか河、は昨日の榮に引かへて變りてとなり、あすか河は大和にある川にて山川の事とて淵瀨變り易すければ、變り易き事にいふなり昔の歌にも、

「世の中は何か常なる飛馬川昨日の淵は今日の瀨とあるなどあり、いまはうきぶをかくれがす、は今は憂き世を隠れ忍びてなり、玉藻前が昨日の榮華に引きかへ、今は忍びて東國に遁れ行くをいひくなり、うき

よは辛き世といふ事、隠れがさといひたらは、はは人目をつゝむものなきを、忍ぶ身といふ事と旅をとするには着るものなれば、東國へ遁れ行きし意とにかゝるなり、せきのしら河、よそになし、は白河の関を後にしてなり、白河の関は奥州白河にあり。

260
438

著作
所有

大正三年十一月十二日印刷
全 年十一月十六日發行

東京市京橋區桶町十三番地
著作及
發行兼
印刷者

重元勝善

電話六四一七番

終

